

さおとめ けんじ
五月女賢司
民博機関研究員

「みんぱく」で アイヌ文化理解をより深く



北海道でのマレク漁の体験学習の様子

(仮小屋) 製作、伝統食材の試食などを体験した。

棚橋さんは「命をいただく」ことへの感謝の気持ちや、自然と一体となって生活していたアイヌ文化をより深く理解することができたと語っている。このような現地体験から得た感動が、このバックの製作にも生かされたといえるだろう。

アイヌは日本の先住民族

アイヌをめぐる最近の動きとしては、二〇〇七年九月の国連総会では、「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が採択されたことが大きい。これを受け、翌年八月には衆参両院本会議が全会一致でアイヌを日本の先住民族と認める決議を採択、政府はこの決議にもとづいてアイヌ有識者懇談会を設置した。

この懇談会は二〇〇九年七月にまとめた報告書で、アイヌの歴史や文化についての教育が義務教育段階においても十分実施されていないこと

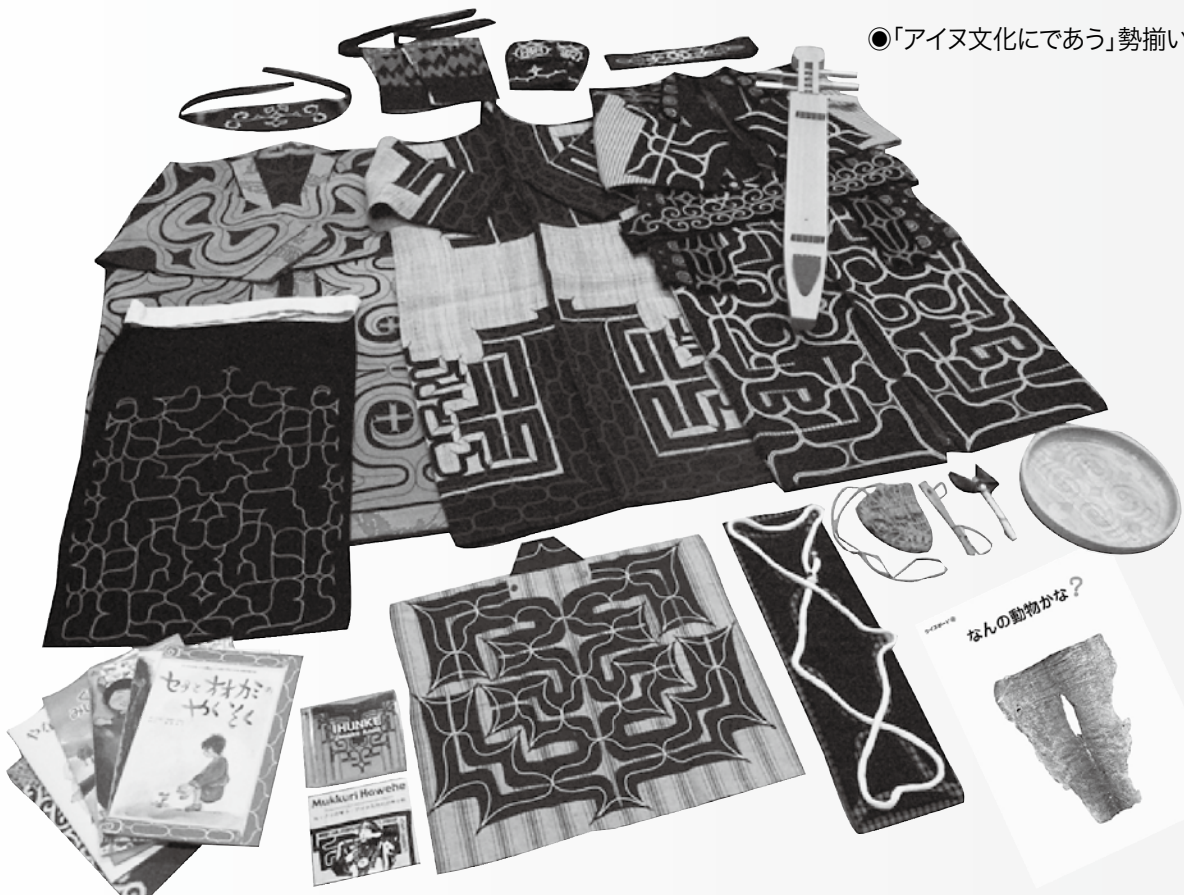
などを指摘している。そのうえで、指導方法についての研究とその研究成果の教育現場への還元、次回の学習指導要領の改訂、短期的には教職員などへの研修の充実と体験学習等の積極的な取組の促進など、幅広い対応を求めている。

一時間の体験でも学習効果が

このような流れのなかで、唯一の国立の民族学博物館である民博の果たす役割は大きい。「アイヌ文化にであう」は運用がはじまってから、すでに多くの小中学校で活用いただいているが、そのうちの一枚、豊中市立大池小学校で活用方法に関する調査をおこなった。

同校では、異文化に触れ自分たちの文化との違いについて考えるために、四年生三クラス一七人が各一時間で「アイヌ文化にであう」を活用した。まず、北海道にはアイヌ語の地名がたくさんあること、アイヌは昔から北海道に住み、独自の文化

◎「アイヌ文化にであう」勢揃い



製作スタッフの感動を包みこんで
このバックは、民博の佐々木利和教授と情報管理施設の棚橋緑さんが

中心となって製作した。製作の前には、アイヌ文化の研究や振興などを担う諸機関で、さまざまな資料や体験学習プログラムの調査をおこなった。北海道ウタリ協会(現・北海道アイヌ協会) 白老支部主催の「平成二〇年度イオル再生事業体験交流事業」にも参加し、アイヌの伝承地であるウヨロ川河川敷で伝統的なマレク漁や投網漁などのサケ漁、クチャ

を築いてきたことなど、アイヌに関する基本を学んだ。次に、衣装の試着をするなど、実際にモノに触れ、その感触や重量感、匂いや着心地などを確かめた。最後には、「ふりかえり」や発表をおこない、とても充実した体験学習であった。

授業開始時、「アイヌ」という言葉を知っている児童はクラスに二人ほどだけだったが、授業の終わりに半数以上がアイヌ文化のことがわかったと挙手した。

このことから、一時間という短時間でもアイヌ文化に関する話を聞き、モノに触れることによる学習効果があったといえるのかもしれない。

児童達は衣装を試着した別の児童に「似合う!」「かっこいい!」と興奮気味に声をかけたり、最後には「同じ日本のなかなのに、文化がたたくさんあって不思議」と話したりするなど、このバックを活用することによって、アイヌ文化への理解が深まったようだ。

「みんぱく」のあらたな可能性

小学校では二〇一一年度から、中学校ではその翌年度から完全実施される新学習指導要領では、「総合的学習の時間」の授業時数が大幅に削減されている。

今年度からは新学習指導要領への

クイズボード「なんの動物かな?」



移行がすでにはじまっており、小中学校が総合学習の枠で民博や民博の資源を活用することは少なくなるのではないだろうか。総合学習から削減された時間が各教科に戻り、小学五・六年生には外国語活動があらたに加わるなかで、「アイヌ文化にであう」などの「みんぱく」の活用のされ方も今後あらたな展開をみせていくだろう。

異文化を理解することの重要性がますます高まってきているいま、新しい授業の枠組みにおいても児童生徒によりよい学びがもたらされるよう、学校の民博利用に関する研究をさらに進めていきたい。